

論文審査の結果の要旨

氏名 津村文彦

津村文彦氏の論文、『タイ東北部における精霊と知識専門家をめぐる人類学的研究』の目的は、タイ王国東北部のラオ系村落における精霊「ピー」についての信仰と、ピーに関わる知識専門家「モー」の諸実践をめぐる現実とが、いかなるかたちで人びとに理解されているかを問うものである。本論文のデータは、津村氏によって、2000年8月から2001年9月にかけて集中的に、また、2002年以降2010年まで断続的に、主として、タイ王国コーンケン県ムアン郡DY地区NK村と周辺の村落において行われた調査によって得られた。調査対象は村民の日常生活全般と、ピー信仰に関わる宗教専門家の宗教実践、また、タイ東北部における伝統的な文字使用、であったが、2001年7月以降は宗教専門家の持つ秘匿的知識を獲得するために、精霊祓除師（「モータム」）に弟子入りをした。また、2007年以降、伝統医療に関する調査も行った。いずれの場合も、調査方法は、参与観察と聞き取りが主である。

本論文は、全10章の本文と、地図、図表、文献表から成る。

第1章では、本論文の目的である「ピーとは何か」を問うために、「わからない、でも怖い」という語りがもつ意味の検討をおこなった。第2章、第3章では、タイにおいて頻繁に出版、映画化されている、ピーの物語を取り上げる。第2章「『ナン・ナーク』の語るもの」では、人口に膾炙し、映画にもなっている物語「ナン・ナーク」を対象として分析を行い、近代化過程のなかで起きた、仏教の国教化と、ピー信仰の周縁化が物語の成立と深く関わっていることを指摘した。第3章では、19世紀末以降タイ中央政府によって「劣った他者」として描かれてきた東北部が、2000年以降のピーに関する映画では、「タイ国を構成する一地方」としての新たな位置づけがみられることを指摘し、その表象から、タイ王国の中央と東北部の関係性、またそこに見られる他者表象の歴史的変遷を分析した。

第4章以降は、前記のNK村での調査資料が分析の対象となる。第4章では、タイ東北部の都市近郊農村の一典型例としてNK村を位置づけたのち、本論文の主たる分析に入る。第5章では、これまで「善霊」と「悪霊」に二分して捉えられることの多かったピー信仰の現代的状況のなかで、ピーに関する二種の専門家、精霊祓除師「モータム」と守護霊司祭「チャム」が二つの規範、「仏教規範」と「共同体規範」をそれぞれ代表しながらも、その境界が政治的にも文化的にも入り組んでおり、それに伴うように、ピ

一も善霊と悪霊のあいだで揺らいでいる様子を描き出した。第6章「ピーの語りと日常的現実」では、「ピーとはなにか」という問題に対し、人々は、「わからない」としながらも、ピーを「直接経験」として語ることによって、理念と現実がズレを含みながらも、「理解不可能」な状況そのものを受容し、そこに「恐怖」という現実が生まれてくることを指摘した。第7章から第9章までは、氏が弟子入りをしたモータムを中心に、ピー信仰に関わる知識専門家について論じる。モータムは仏教を背景とし、ピーを触知可能な「モノ」として認識することで、ピーをコントロールしようとする。また、伝統医療の薬草師は、「土着」、「伝統」、「近代」といった、異種の医療を組み合わせた実践を行うことで、その社会の病いと癒しをめぐる現実が生成している状況を描出した。第9章でも、モータム、薬草師に加えて、毒蛇に咬まれたときの治療を行う「モーパウ」を取り上げ、近代医療で治療可能でありながらも、近代医療では説明のできない呪術的な実践を継続することの意味を考察した。すなわち、第7章から第9章までは、知識専門家のさまざまな実践を通じて、複数の「現実」が、多様な知識を媒介として、村落世界に散在する様子を豊富な事例をもとに記述しているのである。第10章の結論では、全体を総括し、「わからなさ」についての議論が行われている。

審査では、本論文の冒頭に、映画を媒体とするピーの現代における表象が語られる是非、知識人類学として展開される議論への、他の事例との比較や、理論的な枠組みの必要性、とりわけ第10章の結論部において、「わからなさ」を抱えながら実践的現実が進行しているというとらえ方はこれまでの議論からどの点でより進んだものになっているか、という疑問がなされた。それに対して、映画はピーの事例としてではなく、タイ社会にピーの概念がいかに長く、広く潜在しているか、という本論文の一次資料の背景として提示されたこと、知識人類学に関する問いには、本論文の議論が一般論ではなく、個別の事例として提出されていること、最後の点、「わからなさ」に関しては、複数の知識体系とそれによる複数の現実が、調和的に共存しているのではなく、現在の多様な社会変化の中で、「わからなさ」をそのまま受容することが、彼らの社会の一貫性を逆に保存し続ける力となっている、という説明がなされていること、が確認された。

上記の内容を持つ本論文は、以下の三点において、文化人類学に対する貢献が顕著である。第一に、個別社会の中にピー信仰に関する知識が複雑に存在していることを、宗教専門家（モータム）に弟子入りすることで深いレベルまで獲得し報告し得たこと。第二にこれまでの呪術研究の流れの中に、より複雑な社会変化の中にも「呪術的世界」が息づいている様子を報告することで、新たな知見を与えてくれたこと。第三に、長い論争史のある、呪術の「合理性」に関して、「合理性」のさまざまなレベルにおいても直

接は相容れない知識、判断が、同時に存在し続けることを、「共在」という表現によって、現実を失わず、かつ議論の整合性にも耐えうるぎりぎりの点まで論証を詰め、今後の研究の展開をうながしたこと、である。

すでに述べたように、審査においては、理論的な面を中心に、いくつかの不十分な点が指摘されたが、本論文の持つ価値は、現時点において十二分に高いものがあり、本論文は文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしていると判断された。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文提出者は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。